

Charles Lafayette Brown (チャールズ・ラファイエット・ブラウン) & ルーテル教会関係年表

西暦	年号 (年齢)	月日	ブラウン関係事項	ルーテル教会関係事項
1874	明治 7	12/3	北米ノースカロライナ州アイルデル郡の農家で第五子として生まれる。父は農場を経営していたが、後に商業に転じてシャーロット町に移る。兄妹が多かった。(父はロバート・ブラウン、母はスーザン・アメリカ。)	
1880	明治 13 (5 歳)		幼少時代はシャーロット町内外の公私立小学校を転々とした。	
1884	明治 17 (9 歳)		9 歳半の時、敬虔で柔和であった母スーザン・アメリカが病没し、親戚に預けられた。	1886 (明治 19) 年 南部一致ルーテル教会成立
1889	明治 22 (14 歳)		14 歳の時、バージニア州リッチモンド市の伯父の家に移って印刷業に従事した。ここに 2 年間滞在中に、第一英語ルーテル教会に出席するようになり、モーザー牧師 (Rev. J. S. Moser) の教化薫育を受けて堅信礼を受けた。モーザー牧師の感化や、友人達の勧告により、献身して伝道者となる決心を固めた。	1888 (明治 21) 年 南部一致ルーテル教会日本伝道決議
1891	明治 24 (16 歳)		ノースカロライナに帰り、サリスバリーに近いベサニー・アカデミーに入学し、L. H. ロースロック (Prof. Lewis Rothrock) 教授の下で学ぶ。ローノーク・カレッジ入学の準備をする。モーザー牧師より堅信礼を受ける。	
1892	明治 25 (17 歳)	9 月	バージニア州サーレムのローノーク・カレッジの 2 年生に編入学。以後、4 年間の研究に精励。サーレム教会の学生伝道に奉仕する。 グリーバー (W. H. Greever) が牧するバージニアのブルーフィールドにあるインマニエル教会で奉仕活動を行う。	2/25 J. A. B. シェーラー、11/23 R. B. ピーリー、来日。シェーラー、英語教師ブラッドベリーの求めで佐賀視察。
1893	明治 26 (18 歳)		デモステネス文芸協会や YMCA の活動会員として活躍し、人望を集めた。大学教会の牧師アーマンド・ミラー博士 (Rev. C. Armand Miller, D. D.) の敬虔な人格と洗練された学識の感化を受け、弁論家としての才能を開花。大学 3 年次に弁論大会で入賞する。	2 月シェーラー、3 月ピーリー、山内量平、佐賀へ赴任。
1895	明治 28 (20 歳)	9 月	ローノーク・カレッジを卒業。卒業演説者として選ばれた。 フィラデルフィア市のマウント・エアリーのルーテル神学校に入学。正式にルーテル神学を修め、満 3 年間学ぶ。	
1896	明治 29 (21 歳)		夏休みにウェスト・ヴァージニアの W. H. Green 牧師の教会で奉仕。 ルター派の注釈書に従って新約聖書の連続読解方法により福音書の研究に没頭。神の聖務 (the holy ministry) のための準備に全力を尽くす。	1897 (明治 30) 年 1 月 シェーラー、病気のため帰国。
1898	明治 31 (23 歳)		ルーテル教会のボードの下にあって、バージニア州グラハムの教会から国内の伝道地での仕事を引き受け、数ヶ月間、極めて有効に教会に奉仕。 6 月 卒業生 32 名の内、成績優秀の 5 人の一人に選ばれる。 7 月 南部一致シノッドの伝道局から外国の伝道地 (日本) に行く招聘を受け、受諾。 マウント・エアリーのルーテル神学校を卒業。	

1898	明治 31 (24 歳)	8 月	南西バージニアシノッドの会議で拍手礼を受ける。	C. L. ブラウン来日し、佐賀へ赴任。 J. M. T. ウィンテル来日し、久留米へ赴任。
		8/18	サウス・バージニア教区の牧師職に就き、日本への出発を待つ。	
		9/2	大学時代からの求婚相手バージニア・E・フランツ (Miss Virginia E. Frantz) とサーレムにあるローノーク大学の大学教会で L. G. ミラーの司式の下で、結婚式を挙げる。フランツはバージニア州サーレムの出身で、1972 年 12 月 29 日生れ、ブラウンより 2 歳年下であった。	
		9/29	大学教会にて送別礼拝をする。	
		10/12	バージニア州サーレムにてボードと最終的打ち合わせ。	
		10/14	新夫人を伴って日本に向け出発。	
		10/20	サンフランシスコより日本に向けて船で旅立つ。	
		11/5	日本伝道のため横浜に上陸。そこから長崎に向かい、ピーリーの出迎えを受けて佐賀に行く。	
11/15	ブラウン牧師夫妻、佐賀に到着。ピーリー夫妻に迎えられる。その後、2 年余りピーリーの許で、日本語を勉強しつつ、後れて来たウィンテルと共に、佐賀市を中心とする伝道に協力した。			
1899	明治 32 (25 歳)	1/29	日曜日、ルーテル教会で最初の拍手式をピーリーと共に挙げる。	
		7 月	熊本から佐賀に帰る列車の中で、五高から長崎に帰る遠山参良に遭遇する。	
1900	明治 33 (26 歳)	4 月	熊本にてイースター礼拝を守る。	C. K. リッパード来日し、佐賀へ赴任。
		6/1	佐賀で第 1 回『教役者会』が開かれ、『アウグスブルク信仰告白の歴史的意義』を発題する。	
		7/12	(~9/4) 避暑のために長崎に赴く。(この頃、遠山参良と出会う。)	
		10/18	(~23 日) 東京で開かれた超教派の「日本在留宣教師会議」に出席。	
		12/10	選ばれて熊本に赴任し、宣教師として伝道を開始。	
		12/13	佐賀教会献堂式。ピーリー司式、ブラウンとウィンテルが聖書を読む。	
		12/14	山内直丸と共に熊本伝道に従事するために熊本に赴任する。家族と共に熊本に定住することになり、新屋敷町 435 番地に仮寓。	
12/15	熊本教会にて歓迎会。			
1901	明治 34 (27 歳)		熊本に来て以来、咽喉を痛め、1 月下旬まで療養。	
		1/31	第五高等学校へ英語講師として出勤。 聖公会の宣教師ジェー・シー・ブランドラム (John B. Brandram) の帰国の後を受けて第五高等学校英語講師となる。(~明治 39 年 4 月)	
1902	明治 35 (28 歳)	4/1	次男ロバートが誕生。	
		12/1	市内新屋敷 453 番地より、山内直丸が住んでいた市内新屋敷 388 番地に移り住む。	
1903	明治 36 (29 歳)	10/1	神学校機関が熊本で開始。ウィンテル、スタイワルトとともに週 12 時間教える。日本人教師は週 4 時間。	ピーリー帰国。
		11/23	『教役者会』がブラウン宅にて開催。	
1904	明治 37 (30 歳)	11/17	日露戦争の帰還傷病兵士への慰安音楽会が熊本陸軍病院で催され、ブラウンはギター演奏、夫人は英語の詩を朗読。	

1905	明治 38 (31 歳)	2/4	熊本教会会堂建築が着工。	10 月博多伝道開始。A. J. スタイワルト来日し、熊本へ赴任。
		6/20	市内水道町 18, 19 番地に熊本教会新会堂が完成し、ブラウン司式のもと献堂式。	
		12 月	日露戦争のロシア兵捕虜 75 名が熊本教会の礼拝に出席。	
1906	明治 39 (32 歳)	4 月	北米合衆国へ一時帰国。第五高等学校英語講師を辞す。	
		5/2	1 年間の一時帰国休暇のためにブラウンはアメリカに向けて熊本を発つ。	
		6/3	バージニアのサーレムに到着する。	
		12/31	C. K. スタイワルト来任、横浜に到着。	
1907	明治 40 (33 歳)	1/12	スタイワルト佐賀に入る。	12 月 L. S. G. ミラー来日し、博多へ赴任。
		5/16	ミッションボードの決議で、ミッション・スクールの創設と組織作りに本格的に取り組むことと、すべての権限をブラウンに委嘱。11 月に日本に帰る予定であったが、自らの病気と、さらに夫人の病気により大幅に遅れ、サーレムに留まる。	
		12 月	L. S. G. ミラー来任。	
1908	明治 41 (34 歳)	2/23	ブラウンの家庭に 3 人目の男子が生まれるが、不幸にも生まれて間もなく天に召される。	F. P. スミス来日し、東京へ赴任。
		9/5	健康が回復し、サーレムを離れ、日本へ出発する。	
		9/6	日曜日の夕、ペンシルバニア州リーディングにあるトリニティ教会で、マウンテン・エアリー神学校校長 H. E. ジェコブス教授の説教で派遣礼拝を持つ。	
		9/15	サンフランシスコより家族および F. D. スミス宣教師 (Rev. Frisby D. Smith) と共に日本に出帆。汽船モンゴリア号にて。	
		10/7	太平洋の船旅を経て、長崎に到着。	
		10/11	夕方、長崎から佐賀を経て、熊本に帰任。	
		10/19	L. S. G. ミラーはブラウンが熊本に帰任したので、博多伝道に専念するために熊本を発つ。	
		10/21	ミラーは博多春吉町 7 番に住む。	
		11/1	スタイワルトは帰任したブラウンに宣教師館 (新屋敷町 338 番地) を譲り、新屋敷町 412 番地に移る。	
		11/24	(~26 日)「第 13 回教役者会」が熊本で 3 日間開かれ、ブラウン宅 (宣教師館) に集まる。	
12/10	バージニア州シャーロットで開かれたボード会議で佐賀幼稚園の建物支援 (1 千ドル)、熊本の宣教師館と博多教会礼拝堂に 1 千 200 ドルの支出決定をすると共に、ブラウン著『Japan for Christ』の出版費用の支出も決定する。			
1909	明治 42 (35 歳)	2/12	社団法人申請のためにブラウンは上京。	9/27 路帖神学校開校。 九州学院敷地買収。
		2/28	東京教会での礼拝を守り、約 3 週間ほど滞在。	
		3 月	上旬、熊本に帰る。	
		4 月	路帖神学校が開校し、ブラウン校長、ウインテル、スタイワルト、久保らが教授陣となる。	
		6/21	社団法人「在日アメリカ合衆国南部福音ルーテル教会一致シノッド宣教師社団」の認可を当時の内務省より受ける。理事は、ブラウン、リップード、スタイワルト、ミラーで構成。	
		9/6	南部一致シノッド第 12 回総会で社団の定款が承認された。	

		7/6	第1回社団総会が佐賀のリパード宅で開かれる。理事長にはブラウン、会計書記にスタイワルトを選出。	
		11/22	熊本市大江に学校敷地の土地購入(8エーカー)完了。総費用は13,643ドル。11月、ブラウン著『Japan for Christ』5,000部出版。	
1910	明治43 (36歳)	4/26	スタイワルト、ミッション・スクールの募金の訴えを主な任務として一時帰国。	社団の名称を、「北米合衆国一致ルーテル教会宣教師社団法人」に変更。
		8/7	ローノーク会議で三ボード(南部一致シノッド、デンマーク福音教会、ジェネラルカOUNシル)による教育事業協約が締結される。各ボードは年間15,000ドル負担し、さらに学校設立のために25,000ドルの追加が可決される。これにスタイワルトは列席。	
		12/14	ローノーク会議の決定に従い、第1回在日宣教師会議「ルーテル日本伝道共同会議」が熊本で開催。ブラウン議長、スミス書記、ミラー会計に選出。	
1911	明治44 (37歳)	4/15	九州学院中学校開校、122名が入学。	路帖神学校を九州学院神学部へ改組。11/3E. T. Jr. ホールン来日し、熊本へ赴任。
		7/20	ブラウン一家、避暑で長崎の雲仙岳に向かう。	
1912	明治45 /大正1 (38歳)	4月	E. T. Jr. ホールン、九州学院英語教師として着任。	1913年9/23 C. W. ヘプナー着任。
		11月	九州学院の本館、寮(100人用)、住居が完成、建築費総費用54,000ドル、募金約51,000ドルを超える。	
1914	大正3 (40歳)	4月	九州学院中学校第4回生入学、全生徒400名となる。	M. B. エカード、M. L. バウス(最初の婦人宣教師)着任。
1915	大正4 (41歳)	3/4	ゼネラルカOUNシル海外伝道局長(Edward. T. Horn, D. D.)が死去。	
		6/21	石松量蔵、三浦冢、本田傳吉、亀山万里、渡辺潔の神学生五名の卒業式が校長ブラウンの司会の下に挙行された。	
		6月	下旬、ブラウン夫人は日本の長崎で生まれた長男チャールズ・フレッド、熊本で生まれた次男ロバート・マーシャルと三男リチャード・ハリーを連れて、帰国の途に就く。	
		11/2	(~4日)第5回在日宣教師共同会議が熊本の新屋敷で開催される。	
		11/17	ボードの局長ロバート・ホーランドが死去。	
		12/9	ボードの決議で、ブラウンが「当面、休暇期間(1916年から)だけ」としてGeneral Secretaryとなる。	
1916	大正5 (42歳)		二度目の休暇でアメリカへ帰る。南部一致ルーテル教会外国伝道局の総幹事となり、2年半事務局で働く。	5/10「九州学院財団法人」認可。(神学部が専門学校令による設置認可を受ける。正式認可は、4月23日付で通達され、5月10日付で九州学院財団法人の認可が熊本県内務部長よりブラウン宛に通達された。)
		3/5	熊本教会の主日礼拝で、九州学院生徒宮原軍蔵以下19名の洗礼式を施す。	
		3/18	ブラウンの送別会が熊本教会で開かれる。	
		3/24	午後1時20分、150名の見送りを受けて、上熊本駅発の汽車で熊本を去った。	
		4/10	休暇のためブラウンはサウスカロライナ州レキシントンに帰国。	
1917	大正6 (43歳)	10/10	ブラウン、住居をサウスカロライナ州コロンビアに移す。	3/22南部一致シノッドとジェネラルカOUNシルの両ボードは「九州

				学院伝道と経営の関与について合意書」を交わす。
1918	大正 7 (44 歳)	11 月	南部一致シノッド、ジェネラルカウンシル、それにジェネラル・シノッドの三シノッドが合同し、北米一致ルーテル教会 (ULCA) を創設。 (第 1 回ボード会議がバルティモアで開かれ、ボード議長にエズラ・ベル、副議長に C. T. ベンゼが選ばれる。ブラウンは、L. B. ポオルフ [財務担当幹事]、ジョージ・ドラック [記録幹事] と共に幹事に任命され、日本伝道の直接的責任を継続して引き受ける。)	1919 (大正 8) 年宣教師会で福祉事業開設決定。
1920	大正 8	4 月	L. S. G. ミラーが九州学院主事に就く。	福祉事業「慈愛園」を熊本に開始。
1921	大正 10 (47 歳)	4/16	アイオワ教区の A. C. ゼーリンガー牧師を同伴して、ニューヨークを発ち、インドを経由して、元ドイツのルーテル教会の伝道地の状況調査のため東アフリカに行く。	1923 (大正 12) 年 東京に福祉事業開設、老人ホームと母子寮開始。
		6/12	ケニアのモンバサに到着。6/24 タンザニアのタンガから奥地に入る。この視察旅行中肉体的苦痛に耐えながら、タンガニーカ地区として知られているライプティヒ、ベルリン、ビールヘルド原野を原住民のガイドによって、およそ 500 マイル近くも歩いて旅をした。現地をアメリカルーテル教会の宣教地として保持する協定を結ぶことに成功し、特別委員としての任務を遂行。	1924 (大正 13) 年 アメリカの排日移民法により内外動揺、抗議。
		9/1	東アフリカを離れ、インドに戻り、宣教の地グンツールとラジャムンドリーで、2 週間滞在する。	
		10/18	リベリア行きの蒸気船が約 2 週間遅れて到着したので、フランスのマルセイユで乗り継ぎするのを止める。マルセイユでシエラレオネのフリータウン行きの汽船を確保する。	
		11/5 (土)	リベリアのモンロビアに着く。汽船の到着が余りに遅すぎたので、都市の外の湾に錨を下ろす。	
		12/5	アフリカのリベリアで死す (47 歳の誕生日の 2 日後)。ボルチモアの家では妻と 3 人の息子が帰宅を待っていた。(合併症を伴う腸チフスによる。)	
1925	大正 14	2 月	九州学院ブラウン・メモリアル・チャペル献堂。	宣教師会「教会完全自給」要請。